

エルサレムで誕生したキリスト教の初代教会で、集まってきた信徒たちのお世話をするために7人の執事が選ばれました。その中でも特に、霊と知恵に満ちたステファノは、民衆の間に出かけて行ってイエス・キリストの福音を宣べ伝えていましたが、その教えがモーセと神を冒瀆するものであると言いがかりをつけられ、ステファノは捕らえられて最高法院に引き出されます。そこでステファノは、神様によって選ばれたイスラエルの民がいかに神様に対して不忠実であったかを、旧約聖書に基づいて説教をします。イスラエルの民は神様に逆らい、神様が送ってくださった預言者たちを殺してしまいました。そして今、かつての預言者たちが預言した来たるべき救い主、イエス・キリストをも殺してしまつたと、そこにいた人々を告発します。このステファノの説教を聞いて激しく怒った人々は、ステファノを都の外に引きずり出して、石を投げつけて殺してしまうのです。ステファノは殉教してしまいました。

このステファノの殉教をきっかけに、キリスト教の大迫害が起こります。サウロという人物がクリスチャンを捕まえては牢に送り込み、クリスチャンは地方へと逃げ、ちりぢりバラバラになっていきました。キリスト教は危機を迎え、まさに風前の灯のようでした。

キリスト教の歴史を見てみますと、それは迫害の連続でした。私たちのこの国でも、江戸時代にキリシタン禁止令が出され、多くのキリスト者たちが迫害され、弾圧されました。

なぜ、キリスト教は迫害を受け、弾圧されるのでしょうか。その理由の一つは、キリスト教が光の宗教だからです。ヨハネによる福音書は、イエス・キリストをこの世に来られた光と表現します。ヨハネによる福音書1章4節から5節にはこう記されています。新約聖書163ページになります。【言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。】人間の心の奥に潜んでいる暗闇は、人間を照らす命の光を理解することはできませんでした。この世を照らす命の光。それは、イエス・キリストを表しています。同じヨハネによる福音書1章9節には、このように記されています。【その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。】すべての人を照らす光として、イエス・キリストはこの世に来られました。ところが光に照らされるのを好まない人たちがいました。しかも、この世には光に照らされることを好まない人たちがとても多くいます。もしかすると、それは私たち自身のことかもしれません。ヨハネによる福音書ではそのことを3章19節以下で次のように語っています。新約聖書の167ページです。【光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。】

こうして、多くの人たちが光に照らされることを恐れて、光より闇を好んでいきました。命の光であるイエス・キリストの御言葉は、私たちの心の内にある暗闇を照らし出すので、多くの人たちは自分の心の暗闇が光に照らし出されることを恐れて、光を憎むのです。ヨハネによる福音書17章14節以下では、そのことをこう語ります。新約聖書202ページになります。【わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが

世に属していないように、彼らも世に属していないからです。わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。】 こうして、世の人々はこの世に來られた光であるイエス・キリストを憎みました。ですから、イエス・キリストに従うクリスチャンは、いつの時代でも迫害を受けてきたのです。

さて、旧約聖書から真理を語って人々を告発したステファノを、そこにいた大祭司や律法学者たちは石打ちの刑にして葬り去りました。福音を葬り去るには、それを語る人たちを弾圧し、物を言わせないようにすればよいのです。ステファノも、その命が奪い去られ、真理の福音を語ったステファノの口も閉ざされてしまいました。こうして、キリスト教は葬り去られようとしていました。ところが、そのような逆境の中で、驚くべきことが起こります。8章4節、「さて、散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた」。ステファノの殉教の死をきっかけとして、クリスチャンは迫害を受け、地方へとちりぢりバラバラにされていきました。ところが、散らされていった人々は、それぞれが逃げ去った地方で福音を宣べ伝えていったのです。こうして、福音は町から町へと告げ知らされていきました。迫害され散らされれば散らされるほど、福音は広がっていったのです。キリスト教を弾圧しようとする人の思惑とはまったく違い、キリストの福音はまるで燎原の火のように広がっていきました。そしてもっと驚くべきことに、このステファノの殺害に賛成し、ステファノの死後、クリスチャンを捕まえては牢に送っていたサウロという人は、やがてパウロという偉大な伝道者になりました。そしてそのパウロが書いたたくさんの手紙が新約聖書の中に残されているのです。このようにして、福音は妨げられることなく広がり続け、そして今や、世界中に広がっています。

ステファノは殉教の死を遂げました。そのステファノの死をきっかけとして始まったキリスト教の大弾圧も、しかしかえって、福音が世界に広がっていくきっかけとなりました。このようにして、神様の御計画は、人の愚かな知恵によって潰されることなく、福音は妨げられることなく、広がっていったのです。

しかし私たちは今日、ここでもう一度大切なことを覚えておきたいのです。このように、ステファノの殉教とそれから始まった大迫害にも関わらず、かえってそのことによって福音は広がっていったのですが、しかしそこには、ステファノの大きな決断があったことをもう一度確認しておきたいのです。ステファノはイエス・キリストだけに従うと決め、それ以外の一切のものに従わないと断念しました。イエス・キリスト以外のすべてをあきらめたのです。そのステファノの決断によって、福音が妨げられることなく、広がっていったのです。迫害によって地方へと散らされていった人たちが、迫害を受けながらも、なぜ、福音を語り続けてくことができたのか。迫害によって地方へ散らされていった人たちには、最高法院に引き出され、死を覚悟しながらも、ただイエス・キリストだけに従い、キリストの福音を語り続けたステファノのあの姿が心の中にしっかりと残っていたのでした。ステファノの決断によって、散らされていった人たちもまた、それぞれが決断をしました。彼らもまた、イエス・キリストに従う決断、それ以外の一切のものをあきらめる、断念する決断をしたのです。だから散らされていっても、福音を語り続けることができた。そしてステファノの決断は、ステファノを石打ちの刑に処することに賛成していたサウロ

をも動かします。サウロはステファノの死をきっかけに、先頭に立ってクリスチャンの迫害を実行しますが、やがて彼も、イエス・キリストと出会い、回心をします。パウロが復活のイエス・キリストと出会い、イエス・キリストに従っていく決断をした背景には、ステファノが喜んで殉教していく姿が大きな影響を与えたことは間違いありません。こうしてステファノという一人の人の決断によって、福音は妨げられることなく、世界へと広がっていったのです。福音が勝手に広がって行ったのではありません。ステファノから始まって、多くの人たちの決断によって初めて、福音は妨げられることなく、広がっていったのです。

こうして、葬り去られようとしていた福音は、葬り去られることなく、迫害を受けて地方へと散らされていったその先で、多くの人々に宣べ伝えられていきました。キリスト教の歴史の中で、何度これと同じことが起こったのでしょうか。今なお、世界のどこかでは、キリスト教の真理の福音に対する弾圧が行われています。しかしそれでも、キリストの福音は葬り去られることなく、世界へと広がり続けています。キリシタンの弾圧があった私たちの国でも、このように教会が広がっています。御言葉は葬り去られることなく、世界に開かれていくのです。

ではなぜ、キリストの福音は葬り去られることなく、世界に開かれていくのでしょうか。それは、イエス・キリスト御自身が葬り去られることなく、死よりよみがえられたからです。十字架刑に処せられ殺されてしまったイエス様は、墓の中に葬られます。イスラエルの墓は洞窟のような場所に遺体を安置し、入り口を大きな岩でふさぎます。イエス様の御遺体は穴の中に閉じ込められてしまったのです。ところが日曜日の朝、イエス様を閉じ込めていた墓の岩は開かれ、イエス・キリストはよみがえられました。人間の知恵や力では、イエス・キリストを墓の中に閉じ込めておくことはできなかったのです。同じように、キリストの福音を葬り去ろうとするあらゆる邪悪な人々の悪巧みにも関わらず、キリストの福音は葬り去られることなく、迫害を受ければ受けるほど、世界へと広がっていきました。ステファノの殉教で風前の灯火となったキリスト教の福音は、散らされることによってかえって世界中に広がっていったのです。そしてそのことを、イエス様は予告しておられました。使徒言行録1章8節で、よみがえられたイエス様は弟子たちにこう語りました。【あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。】

私たちも、イエス・キリストの証人として、真理の福音を宣べ伝える尊い働き、命の光の福音を人々に伝えていく宣教の働きを、共に担わせていただきたいと思います。

お祈りしましょう。